

カウンセリング・マインドという概念および態度が 日本の生徒指導や教育相談へ与えた影響*

主に問題点に関して

金原俊輔**

The influence of the concept and attitude, counseling-mind, on the Japan's
student guidance and educational counseling
Focusing on the negative issues

Shunsuke KANAHARA**

要旨

アメリカの臨床心理学者のロジャーズが唱えた学説は日本で広く受け入れられた。受け入れられた結果、彼が創始したクライアント中心療法をおこなうカウンセラーが多数あらわれ、彼が主導したベーシック・エンカウンター・グループも流行した。そればかりではなく、彼の考えかたを土台とするカウンセリング・マインドという言葉すらできた。カウンセリング・マインドの概念・態度は特に教育現場において普及し、やがて絶対視されるようになった。児童生徒を指導する場面で、児童生徒から相談を受ける場面で、教師はカウンセリング・マインドを所持しておくことが要求されるようになったのである。本論文は、こうした状況の中で起こったふたつの事件（金属バット事件と中学生自死事件）を参考にしながら、カウンセリング・マインドが日本の教育現場におよぼした負の影響について考察したものである。さらに、ロジャーズ学説を重視する人々が素人性を有しているという指摘も取り上げ、検討した。最後に、ロジャーズの影響が現在はかなり弱まっている事実にも言及した。

キーワード

カール・ロジャーズ、クライアント中心療法の日本での展開、金属バット事件、日本の教育臨床

1 はじめに：

カール・ランソム・ロジャーズはアメリカで活躍した心理学者である。日本において信奉者が多かった。本論文は、日本でのロジャーズ学説とりわけ「クライアント中心療法」の展開を概観しつつ、同学説を背景にしたカウンセリング・マインドという概念そして態度が生徒指導や教育相談に

与えた影響を検討するものである。上記概念・態度は教育の場に益した面が多々あったと思われるが、論文では、主として望ましいとはいえない影響のほうに目を向け、検討をおこなう。まず、ロジャーズの略歴と業績を概観し、そののち検討作業へと進む。論文中、引用文の省略は「[中略]」で表わし、引用文における人名表記と数字表記は引用先に従った。

2 ロジャーズとクライアント中心療法：

ロジャーズは、アメリカ合衆国の臨床心理学者だった。白人男性で、1902年、イリノイ州に生まれた。1924年、ウィスコンシン大学を卒業した。ユニオン神学校で学んだのちコロンビア大学大学院で心理学を専攻して1931年にPh.D. (哲学博士)の学位を取得した。ニューヨーク州のロチェスター児童虐待防止協会で勤務し、退職後、オハイオ州立大学、シカゴ大学、ウィスコンシン大学、の教授を歴任した。大学を離れてからは西部行動科学研究所さらに人間研究センターに所属し活動した。日本では来談者中心療法とも呼ばれるクライアント中心療法の創始者として知られ、また、「ベーシック・エンカウンター・グループ」^(注1)の推進者としても世界的に著名だった。1956年、アメリカ心理学会の「特別科学貢献賞」を受賞し、1972年、同学会「特別職業貢献賞」を受賞した。1987年、85歳だった時にカリフォルニア州において死去した。

ロジャーズが『クライアント中心療法』(2005)を出版したのは1951年だった。彼がこの療法をどのようなものとみなしたかについて、越川(1999)がまとめている。

問題は何か、どう解決したらよいかについて、最も良く知っているのは、クライエ

* Received December 1, 2014

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 社会福祉学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

ント自身である。したがってセラピストはクライアントに何かを教える必要はない。クライアントの体験に心を寄せて、その体験を尊重することが重要である。このような「クライアント中心」の態度によって、クライアントは本来の力を十分に発揮し問題を解決していく、と考えたのである（p.203）。

ロジャーズは新たなカウンセリング法であるクライアント中心療法を提唱する中でカウンセラーの態度に焦点を当てた。何の脅威も感じさせない安全かつ受容的な雰囲気のもとでクライアントの主体性・自発性を尊重することが、カウンセリングにおいてカウンセラーが提供できる最も有効な援助である、としたのだった（諸富、1997）。

3 日本でのロジャーズ学説の隆盛：

ロジャーズの主張をアメリカ人講師から学んで初めて日本に紹介したのは、正木^(註2)だった（村山、2012）。1952（昭和27）年だったといわれている（生田、2012）。以後、1950年代半ば（昭和30年前後）にかけ、国内においてロジャーズ学説およびクライアント中心療法の理論がくわしく紹介された（佐治、2006）。

1955（昭和30）年、友田^(註3)が中心となったロジャーズ流のワークショップに40～50名の学校教員や企業人事担当者それに心理学研究者たちが参加し、この参加者たちが核となって我が国で最初のロジャーズ・ブームが起こった（氏原、2012）。当時以降の様子について、アメリカでカウンセリング心理学を学んだ國分（1998）は「昭和41年（1966年）に帰国した。その頃の日本はロジェリアン（ロジャーズ理論の信奉者）がカウンセリング界を支配していた（p.27）」、こう描写した。ブームは継続し、同じく國分（1998）によれば、一時期、日本のカウンセラーの60パーセントないし70パーセントがロジャーズ派だった。

このような状況を頼藤・中川・中尾（1993）は、セイトカアワダチソウめいた帰化植物現象のように見える。それほど日本では「どこにでもころがっている」心理的援助の形態である（p.115）。

歯に衣を着せない表現で揶揄した。

同療法が日本で普及した理由として、近藤（1998）は民主主義の浸透を想定している。

クライアントを一人の個人として認め、自立を信じるという基本的な立場が、第二

次大戦後のわが国のアメリカ的な民主主義の導入と広がりとともにシンクロしたと考えられる（p.139）。

保坂・浅井（2004）も、ロジャーズの学説が「日本人になじみやすかったためか、戦後の民主主義という時代背景ともマッチしたため（p.224）」と、民主主義を原因のひとつとして説明した。

佐治（2006）の見方は、

人間性の性善説に代表されるような、暖かい雰囲気とか、心地よい穏やかさといった、望ましいと日本人が考える漠然とした空気が、これも日本的な対人関係の親和性をよしとする風土と結びついて、何とはなしに親しみやすい考え方としてうけとられた感じがあった（p.289）。

日本人にとっての親しみやすさを鍵にしたものだった。

ベーシック・エンカウンター・グループも国内で盛んに用いられた（石口、2008）。教育界では効果的な学級運営をめざし、産業界では新人教育あるいは管理職者のスキルアップをめざして、重用されたのだった。

4 カウンセリング・マインド：

ロジャーズ学説が日本で大きく展開していた時代に「カウンセリング・マインド」という言葉ができた。これは和製英語で、ロジャーズ自身が提唱した言葉ではない。当該語は友田が主催した1955年のワークショップ参加者たちの間で生まれたという（氏原、2012）。他の説では、

1982年に東京都議会文教委員会でなされた、「今や、1人ひとりの教師がカウンセリング・マインドをもって教育にあたるべきである」との発言が契機になったといわれている。この言葉をキーワードとして、80年代以降の教育雑誌には、教師はカウンセリング・マインドをもって児童生徒の心を共感的に理解しなければならないという主張がなされるようになった（荻谷・濱名・木村・酒井、2000、p.47）。

ともいう。同語が初めて使われた年の特定は困難で、1955年から1982年の間だった、程度のことしか記述できない。

渡辺（1996）は、語の由来を日本人の精神性を含めながら考察した。

ロジャーズが技術や方法ではなく、カウンセラーの態度、言い換えれば「心」を重

視したことは、精神主義の日本人にアピールし、ロジャーズも用いなかった「カウンセリング・マインド」という言葉を作り出したと考えられる。人間疎外の時代風潮にあってカウンセリング・マインドは他者の存在に目をむけさせ、人間関係の重要性を認識させるのに貢献した (p.25)。

さて、カウンセリング・マインドという言葉の意味であるが、人があたかもカウンセラーであるかのように他者に温かく接することをさす。これを桑原 (1999) はロジャーズの「受容・共感・自己一致」という3条件に基づいた概念であると説明した。同じく阿部 (1999) も、つぎのように解説している。

カウンセリングの過程でカウンセラーは、クライアントが安心して自己探索をし、自己理解・自己受容を促進していけるように、クライアントとの間に独特の人間関係や心理的風土を形成していく。このときに重要なカウンセラーの心構えは、ロジャーズによって、カウンセラーの3条件として提示された。すなわち、カウンセラーは、クライアントに対して誠実に接し、その意見・感情・人格を尊重し、温かく受容することが大切であり、その反応をクライアントの視点に立って理解しようと努めることが大事であると。ロジャーズによれば、この心構えは、人間の精神を健康にするために必要不可欠なものであり、カウンセリング関係だけに限定されるべきものではない。親子関係、教師と生徒の関係、治療者と患者の関係、上司と部下の関係など、広範な人間関係に重要な要因であると考えられている (p.89)。

カウンセリング・マインドはクライアント中心療法が重んじるカウンセラーの態度をそのまま取り入れた人間関係のもちかたで、これにより他者理解を深めようとする。

5 教師のカウンセリング・マインド：

既出の阿部 (1999) が整理したうち、特に「教師と生徒の関係」においてカウンセリング・マインドが尊重されるようになった^(注4)。一例として、松原 (1999) は「すべての教師がカウンセリングマインドを」という表題のもと「教師が、カウンセリングの理論や技法を学習し、カウンセリングマインドで教育することが望まれる。また心

を育てる予防的・開発的カウンセリングを学校内ですることも期待される (p.218)」と提唱した。教育界全体がこのような発想に至ったのだった^(注5)。教師が児童生徒に接する際に決めついたり説教したりするのではなく、カウンセリング・マインドを持って柔らかく関わるべき、児童生徒を理解しようと努めるべき、ということである。本論文では、教師のカウンセリング・マインドを「受容・共感といったカウンセリング的な態度をさす。教師と生徒との関係において教師が身につけておくことが望まれる (高野, 1991, p.78)」ものと定義し、論を進めてゆく。

カウンセリング・マインドの語が普及するに伴い、教育現場において当該語が絶対視されるようになりだした。教師が授業を進める上でも、進路指導をおこなう上でも、カウンセリング・マインドが大事とされ (永瀬, 1990)、保護者と接する際にも用いられるべきものとされた (桑原, 1999)。とりわけ生徒指導および教育相談への影響は強いものがあつた (大野, 2003)。生徒指導とは「生徒ひとりひとりが校内、校外における現在の心理社会的環境へ適応できるように、さらには将来の社会生活における適応や自己実現に役立つように、生徒の個性と発達段階に則して、心身の健康と社会性を育成・促進することを目的にした教育的指導活動 (高野, 1991, p.8)」である。また、教育相談とは「主として生徒の適応障害や非社会的、反社会的な行動の予防や回復を目的にした、個別的な生徒指導 (高野, 1991, p.9)」である。つまり、生徒指導の一領域に教育相談がある。とにかく、児童生徒を指導する場面で、児童生徒から相談を受ける場面で、教師はカウンセリング・マインドを所持することが奨励されるようになったのだった (高野, 1991)。児童生徒らが示した校則違反の問題には「生徒がとった行動はさておいて、その行動の背後にある動機に注目する (上地, 2010, p.11)」ありかたが勧奨された。いじめ問題に対しては「生徒に、温かい指導 (カウンセリング・マインド) をしたら、かなりいじめも防止できると思う (松原, 1998, p.168)」という発想につながり、不登校問題に対しては「ロジャーズのカウンセリングの影響を強く受けていた。そのため『しばらく子どもが成長するのを待っている』『待っていればそのうちに時が来て自然に治る』『刺激しないほうがよい』という、受け身的要素が強い指導が大半を占めていた (國分・門田, 1996, p.160)」と

の状況につながった。

高垣（1991）はこの傾向に疑問を抱き、

学校に、カウンセリングや「カウンセリング・マインド」を導入したとしても、それが本来の意義をもって有効に機能するとは、とても考えられない。[中略] かりに無理にくっつけたとしても、片方のこわい目でにらみつけながら、もう片方の「共感的な目」で子どもをとらえて、いったいどのような指導のみとおしがみえてくるというのであろう。選別と管理の怖い目に、「カウンセリング・マインド」をはりつけても、子どもが信用するはずもない。選別・管理の体制を維持する学校に、それでもカウンセリングを調和的に位置づけようとするならば、カウンセリングを管理体制の補完物として機能させる以外にない。それは、言ってみれば、「そうか、そうか」と、子どもをなだめすかし、うまくまるめこんで、管理体制に順応させる類の、まがいもののカウンセリングである（p.137）。

と発言した。二律背反であるか偽物である、との指摘を含んだ発言である。

河上（1999）は、カウンセリング・マインドの普及が教育現場における学級崩壊や校内暴力悪化を招いたと見た。そして、

学校は全体として、自由・放任の方向に動いている。[中略] 教師のなかにも、ものわりのよい教師がふえている。「生徒を抑えるのはまずい。生徒の言い分をよく聞いて納得させることが大切だ。悩みをよく聞いて、カウンセリングマインドで生徒に対さなければならない」。このような考え方が広まっているのだ。反対に、「基礎的学力、生活の仕方、人間関係のつくり方、やっていいことと悪いことなどは生徒がいやがっても押しつけなければならない」という考え方はどんどん後退している（p.209）。

以上の感想を語っている。カウンセリング・マインドは教師を弱腰にしてしまう概念であるという感想だ。

吉田・中井（2003）も、

学校関係者はみな一様に生徒理解といえ、こころの理解であり、そのためにはカウンセリング・マインドが必要だとしている。とりわけ、教師が生徒を真に理解する

ためには、C・ロジャーズの来談者中心療法よろしく、生徒一人ひとりに深い関心を示し、生徒の気持ちを相手の立場や枠組みに立って受容すること、すなわち共感的に理解することが求められている。宮台真司によると、生徒のこころを理解せよ（「こころの理解」）という課題達成は、それに成功しても失敗しても、「もっとこころを理解しよう」と言うように終わらない。つまり、「課題への障害が、課題達成の誤りよりも、課題達成の不完全さを意味するものだと理解され、課題は永続する」。そうした意味において彼らは、「こころの理解」とはN・ルーマンの言う「コミュニケーション・メディア」、すなわち「コミュニケーションを永久に循環させる触媒装置」だと指摘している。従って、こうした課題達成を教師が目標とする以上、教師にとって生徒理解は永遠の課題となり、彼（彼女）は疲弊してしまうことになる（p.206）。

カウンセリング・マインドの語が教育界を席卷したために「心の理解」ばかりがめざされ、しかもそれは達成困難で、現場が堂々めぐりに陥ってしまったと考えた。

6 事件・1：

こうした中、ロジャーズ派の一瀬（1995）による、つぎのアドバイスがあった。

家庭内暴力を重ねている高校生が少々気を静めて自室でからだを横たえていると、母親があたたかい食事を運んでくれた。彼はいきなりその食事を盆ごと母親の背にぶつけてしまった。その話を聞いていた治療者は「お母さんもつらかったでしょう」と返したという。しかしながら、母にぶつけてしまったと述べた彼の心情に、治療者はこたえるべきであろう。後刻彼は母親の気持ちを気にした治療者に立腹し、「俺の気持ちも察してくれよ」と、怒って帰ってしまった（p147）。

母親の身体的および精神的痛みをまず気遣うことがとりたてて不適切とはいえ、批判されている治療者の応答に大きな過失があったとまでは考えられない。そこに過失を見出すこの学派には、クライアントの感情を受容することが最優先ではない事例や場面に対応する力が不足しているのではないか、このような懸念が生じる。

そして1996（平成8）年、父親が中学生の息子の暴力に耐えかね、その息子の就寝中に金属バットで殴打し殺害した、いわゆる「金属バット事件」が起こった。父親は近隣のクリニックに約1年間通い、医師から「息子の暴力を受容すべき」というクライアント中心療法的なアドバイスを受けていた（鳥越・後藤、2000）。当該事件は学校で発生したものではないが、カウンセリング・マインドが児童生徒およびその家族にもたらす影響を考察する上で、重要である。

呉・宮崎（1999）がおこなった対談で、宮崎は事件を振り返り、

いまのカウンセラーは、だいたいロジャーズというアメリカの心理学者の強い影響下にある点です。[中略]「子供の要求に応じてやるのが一番」というのは、この種のカウンセリングの常套句で、まずは自然的欲求を満たしてやり、さらに親も裸の一人になって対峙的ではなく共感的態度で臨めば、やがて子供は自ずと心を開き、前向きな自己実現を模索しはじめるという理論に従った助言なんですよ。しかし、そうした「ポジティブな」「クライアント中心の」指針や助言が何の役にも立たず、むしろ危険性を放置してしまう可能性があるということは酒鬼薔薇事件でも明らかになったところですよ（p.25）。

後続した酒鬼薔薇事件^(注6)とも重ね合わせて、きびしく非難した。この「（ロジャーズの考えかたに従うと）危険性を放置してしまう」旨の指摘と同様の指摘は、国外の研究者たちからもなされている。たとえばKelling（2001）は、ロジャーズを語る文中において、無条件の肯定的配慮^(注7)には限界があると主張した。

小さなジョニーが、妹のメリーを殴り始め、しかも彼の有機体的価値づけの過程が殴ることを好んでいると告げるときには、両親はどうしたらよいのか、という疑問も提起する。ロジャーズのパーソナリティ理論に従えば、両親は尊重の条件を押し付けてはならない。すなわち、両親はジョニーに対して、妹を殺すならお前を愛することはできない、と言ってはならないのである。両親は、ジョニーの有機体的価値づけの過程を当てにするしかないのである（p.1602）。

そして、ロジャーズの人間観は「ほとんど悪を

取り上げていない（同）」と追及して、悪を包含した人の心の全体に目を向けない瑕疵を弾劾している。

ケイヴ（2007）もまた、

人はみな生まれつき善であり、無条件の肯定的な尊重に値するという考え方も、たとえば反社会性人格障害などのような場合には受け入れがたい（p.100）。

このように書き、善のみを想定して関わろうとするロジャーズ的対応に首肯しかねる意を明らかにした。教育の場面においては、それ以外の社会的場面と同様、悪が存在し、反社会性パーソナリティ障害（児童生徒の場合は18歳未満であるため「行為障害」）的^(注8)な傾向も存在する。ロジャーズの人間観はこうした現実に対応する視点を備えておらず、教育現場におけるカウンセリング・マインドというスローガンも児童生徒たちに悪が存在する可能性を直視していなかった。そのために、本項のできごとばかりではなく、無数の不幸際につながったと考えられる。

金属バット事件に話題を戻すと、小浜（2002）も事件を検討した。

現在「カウンセリング」と称する対応技法は、クライアントのはまり込んでいる状況があるがままに受け止め、理解し、そして、固定的な価値判断や権威的な立場からの強制的な指示を避けて、クライアントの立場にできるだけ寄り添うようにアドバイスするというのが主流となっている。[中略] それ自体としては、どんな「思想」でも「イデオロギー」でもなく、単なる「形式」にすぎない。しかし、まさにその「形式」こそが、ひとつの無力かつ無効な「思想」や「イデオロギー」を呼び込みやすいといえるのではないかと（p.310）。

ロジャーズの受容・共感・非指示という形式が思想に変質した事情の検討である。加えて小浜（2002）は、加害者となった父親自身がカウンセラーの心得を有していたことから、

「クライアントの状況があるがままに受け止める」という態度、精神的雰囲気、彼が相談したカウンセラーと深く共有していたことが問題の重要なポイントである（p.311）。

と、ロジャーズ理論の共有がマイナスに働いた可能性も示唆した。クライアント自身の回復力を信頼するクライアント中心療法そしてカウンセリン

グ・マインドの特色が、急所として突かれた事件だった。

7 事件・2：

別の事件が続いた。吉田・中井（2003）によれば、

2001年11月、スクールカウンセリングに熱心で、「教育相談の手法はカール・ロジャーズにかなりの部分を負っている」と言われる埼玉県において、学校の相談室に通っていた中学生2名が、「人生に疲れた」という遺書を残し、ビルから飛び降り自殺をした。ところが、そのような相談活動にとって、最低最悪の事件が起きているにもかかわらず、ほとんどのマスコミは、ここの相談員やスクールカウンセラーの配置に何の疑問（たとえば、C・R・ロジャーズの提唱した自己理論は、あくまでもアメリカの高等教育段階、しかもきわめて優秀な大学の学生相談室のカウンセリングを拠り所に構築されたものであり、我が国の初等・中等教育段階においてそのままのかたちで通用するのだろうか、など）も呈することなく、その責任も追及しなかった（p.44）。

ロジャーズのやりかたがアメリカの教育臨床では通用したとしても日本の中学だの高校だので通用する働きかけになるとはいえない、という抗議である。文化や対象の違いを考慮にいたした説得力がある抗議と思われる。ただし、ホーガン（2000）が引用した、非行少年たちに関わったロジャーズ式カウンセリングの効果の調査を見ると、アメリカにおいて必ずしもロジャーズの方法が通用していたわけではなかった現実が窺える^(注9)。

調査の一つが、ケンブリッジ・サマヴィル非行予防プロジェクトだった。1937年に始まったこの研究は、600人以上ものボストン在住の少年の追跡調査だった。非行に走る危険性のある少年に対しての非行の進行度合いを追ったのである。調査開始時の少年の平均年齢は10歳だった。彼らは2つのグループに分けられた。最初のグループの少年は、平均5年半にわたって、月2回、精神分析の訓練を受けたソーシャル・ワーカーか「人間的経験療法」の訓練を受けたソーシャル・ワーカーのカウンセリングを受けていた（人間的経験療法は、アメリカの心理学者カール・ロジャーズの創案

によるもので、当時の流行りだった）。もう一つのグループの少年たちは、何の治療も受けなかった。1948年までは、2つのグループの犯罪記録には、特段の差が見られなかった。1950年代、さらには1975年も同様。しかし、その時までには、2つのグループの間に興味深い差異が生じていたのだ。何らかの治療を受けていた者で、その後、罪を犯した者は、一度ならず二度までも罪を犯しがちであったのだ。また研究者たちは、治療期間の長ささと犯罪活動の程度の間、正の相関関係、つまり期間が長いと犯罪の程度も凶悪になる関係、があることを発見した。この研究は、治療によって、若者たちが一生罪から逃れる助けになるどころか、逆に、罪を犯す危険性が増していたことを示しているように思われた（p.131）。

関わりによってクライアントたちを悪化させたわけであり、日本の臨床家また教育者たちがこのような否定的データの存在を無視して（あるいは気づかずに）ロジャーズの説を過信し、カウンセリング・マインドなる語まで生んだことは、軽率だったといわざるを得ない。その流れが上述されている二人の中学生の自死事件を引き起こしてしまった。

白石・立木（1991）は別種の調査を論じた。

メニングァー財団の調査によると、自我の強度が低い場合には、転移感情に焦点を当てる治療が効果的であった。逆に、非指示的・支持的療法や精神分析療法はかえって逆効果をまねいた。自我の強度が低い場合、セラピストと深い対人関係を結ぶことができない。そのために非指示的・支持的療法は奏功しないのだと考えられた。[中略] これらの調査は自我機能の弱さの指標、すなわち対人関係の質、不安に対する耐性、そして治療に対する動機づけの低さなどが認められた場合、非指示的・支持的療法や精神分析療法は逆効果をまねくことを示した（p.17）。

これは1973年にアメリカで発表された調査報告に基づく文章で、当該報告では重い精神疾患や境界性パーソナリティ障害^(注10)などに対する心理療法の効果が検証されている。文中で言及されている「非指示的・支持的療法」とは、クライアント中心療法ならびに同療法から直接的な影響を受けた各種心理療法を意味している。児童生徒たち

のように「自我の強度が低い」クライアント層に対してやはり効果が認められていない。この報告に接することでもカウンセリング・マインドを教育現場に導入した動きへの批判が生じてくる。

8 専門性の問題：

さて、クライアント中心療法をおこなう臨床家たちは高い専門性を身につけていない模様だ、という疑問の声がある。この件は、教育の場でのロジャーズ学説の重視（つまりカウンセリング・マインドを基盤にした関わりかた）が要因となり発生させた諸問題の根底に横たわるものではないだろうか。

久野（1990）は、ロジャーズおよび日本のロジャーズ派の人々に関して、

ロジャリアンと称する似非療法家がわが国の心理臨床を牛耳った時代があった。カウンセリングの力の字も知らない面々がただ、クライアントの陳述に頷いていればいいという程度の理解のもとにノンダイレクティブ・カウンセリング、クライアントセンタード・セラピーなどという技法を日本国中に蔓延させたが、それがわが国の精神医学や心理臨床にどれほど役立ったかは疑問である。[中略] ロジャースの最も評価し得るところはクライアントの過去の分析やこころの内的過程の分析よりも、現在の状況の分析を重視したところにある。そしてマイナスの評価は症状そのものに重点を置かず、人間性といったより抽象的で、哲学的、主観的なものに重点をおいたことに与えられる。本来ロジャースの特徴は徹底したクライアントサイドに立った経験主義と実証主義にあり、その研究者としての姿勢にフロイト的な権威主義や教条主義への歯止めがあった。研究者としての彼は常に他の科学者の同意が得られる水準での科学性をもっていたが、一面での哲学的な主観性との矛盾を解決し得ないでいた。一方、わが国のロジャリアンの特徴はこの中、哲学的な主観性のみを好んで受け入れることで、客観的で綿密な治療過程の分析を怠ったことにある（p.105）。

相当な苦言を呈している。

渡辺（1996）は、カウンセリング・マインドの概念により「カウンセリングの専門性、科学性を軽視する風潮を助長させる」というマイナスの影響

があったことも見逃すことはできない（p.25）」との危惧を示した。

氏原（2009）もロジャーズ理論に親しむカウンセラーたちは素人的であると難じ、

どんな立場で実践に携わっているのか尋ねると、ほとんどが来談者中心療法にユング（フロイトでもよい）の考えをちよつと、などと答える。どんな方法で、とさらに問うと、もっぱら傾聴することに力をつくしています、と答える。このクライアントにこの私がお役に立つためにどんな風に対応すればよいのかが、ほとんど考えられていない（p.11）。

と慨嘆した。

この氏原^(注11)は、(1) カウンセリング・マインドの言葉には役割という視点が欠落しており、教師は教師の社会的役割でしか生徒と接することができないにも関わらず、その前提が無視されている、(2) 同語はカウンセリングの専門性や独自性を曖昧にしてしまった、という2点を掲げた批判もおこなっている（荻谷・濱名・木村・酒井、2000）。

こうした諸論から考えを展開させると、学校教師たちは教育のプロフェッショナルではあるものの、カウンセリングのプロではなく、むしろ素人である。そのような人々が、熟知していない心理学の一学派が貴んでいたに過ぎない概念を教育の場に持ち込んでしまった事実は、素人が学術概念を弄したことになる、と指摘できるかもしれない。

東山・藪添（1992）は、学校カウンセリングについて考察した上で、

ロジャース理論が盛行したのはカウンセラーの人間性で迫れるので、言うなれば手っ取り早かったからであろう。そして、この手っ取り早さが先にも述べたようにカウンセリングを一時的なブームで終わらせてしまう要因にもなった（p.25）。

と結論したが、この結論は上記指摘を支持するものである。

9 考察：

本論文第6章・第7章・第8章においてカウンセリング・マインドの限界を示唆するできごとならびにコメントを展望した。本章では、上記各章の検討をおこなった上で、カウンセリング・マインドに伴って生じた負の事象の振り返り、カウンセリング・マインドを推進した人々への疑義、

の2件を記述する。

まず、第6章に関連した本論文執筆者の所思を述べたい。執筆者は、しつけの場面、教育場面、カウンセリング場面で、親・教師・カウンセラーが子どもたちに対峙して何かを教え込むことは肝要と考える。それにより子どもたちから煙たがられ嫌われても、子どもたちの将来のために断行すべきだ。しかし、カウンセリング・マインドはその種の積極的な対処をなし崩し的に弱めてしまった。当該語のせいで長上者が「物を壊さない」「乱暴しない」「盗まない」「目上の人には敬語を使う」などといった基本的な事項を子どもたちに教示することを遠慮するようになり、同時に、彼らが持つべき「子どもたちにどう思われても構わない」という覚悟も抑制した。その結果、子どもたちに幾多の問題を生じさせた。第6章で引用した事例は全体から見ると氷山の一角に過ぎないと思われる。

第7章で看取したものは、中学生自死という痛ましい事件の背景に存在した、舶来の考えかたを無批判に受け入れてしまった関与者たちの不用意さである。日本人が海外とりわけアメリカ合衆国からの影響を被りがちな傾向はしばしば指摘される。影響のどれもが良くないとはいえないが、中には良くない側面を含む影響もあるだろう。良くない側面があり、そしてそれが子どもたちへの関わりかたであったとき、良くない影響の余波は子どもたちの命までを脅かし、それは（極端に言えば）子どもたちが高齢となるまで続く。関与者は差し障りが長期的に継続し得る可能性を慮るべきであったと本論文執筆者は思料する。ただし、ある心理療法の関わりを受けた児童生徒がある問題行動を起こした際に「問題行動の原因は当該心理療法であった」と因果関係を特定するのは行き過ぎであろう。本論文であつかった金属バット事件も中学生自死事件も、加えて本章下段で用いる架空の例も、「カウンセリング・マインド的な関わりが原因のひとつとして想定される」程度の指摘しかおこなえない。

第8章で窺えることは、およそ特定の領域に関して専門性を追求した経験を有する人は専門の重みというものを熟知しているはずであり、自身が詳しくない分野の主張を取り入れる行為に躊躇を感じるはずである。「カウンセリング・マインドの概念・態度は必須」と提唱した心理学の専門家たちそして提唱に賛同した教師たちに躊躇が生じなかったことは残念だった。その点に彼らの素人性がほのめいている。人がカウンセリングを実施

するにあたって種々の訓練・知識・経験が要請されることはいうまでもない。彼らは、このような要請を知っていたと想像されるが、要請を軽んじてしまい、「ロジャーズの学説だけで来談者に役立つ」と考えたのだった。

現在、わが国教育界において不登校児童生徒数の増加が問題となっている。原因のひとつとしてカウンセリング・マインドがあげられよう。教師たちは、あたかもカウンセラーであるかのような態度で不登校の児童生徒に接し、本人に起こり得る困難などを考慮せずに彼らの言い分を傾聴した。アドバイスをせず、登校刺激もあたえなかった。その結果、子どもたちに変化が生じなかったばかりか不登校が増加したのである。いじめ問題に関しても同様である。いじめを主導・加担した児童生徒に接する際に、教師は当人らの気持ちを考慮しながら対応し、してはならないことはどのような事情があってもしてはいけない、ということ教えるチャンスを逸してしまった。いじめられた児童生徒たちは自死を企て、場合によっては実際に自殺するという事態につながった。いじめた側も加害者として社会的制裁を受ける成り行きとなった。非行問題について述べると、カウンセリング・マインドを有する教師たちの非行少年・非行少女への対応により、万引き被害が絶えなくなった商店は赤字をだして閉店しただろうし、非行生徒らがたむろする地域の住民は夜間の外出を控えるようになったかもしれない。カウンセリング・マインドは教師が問題を起こした児童生徒に強圧的な対応をすることを避け、物わかりが良い人間として彼らと良好な関係を構築できた反面、相手にいっそうの問題が生じる結末や教師自身は会ったことがない人々に皺寄せがおよぶ展開を前提とした概念・態度であったといえる。

つづいて、カウンセリング・マインドを尊重・実践した人々に焦点を当てて検討してみると、同語を重視した彼らは善意の塊のような人々であったはずだ。たんに、その時代に主流だった心理療法を学び、当該療法から派生した発想を重んじたに過ぎない。過ぎないことではあるものの、カウンセリングも教育活動も他者の人生に関わる責任重大な行為である。そのように責任が重い行為に（いかに時代の趨勢であったとはいえ）かなり根拠に乏しく耳触りの良さばかりが特徴的な発想を奉ってしまった点では、彼らのありかたに不信を禁じ得ない。当時、すでに行動療法はエビデンスに基づく関与を提唱し、森田療法もエビデンスを

提示していた。さらに認知行動療法も台頭していた。カウンセリング・マインドを金科玉条としていた人々は、そうしたエビデンス中心の情勢を顧みなかった。

結論として、本論文執筆者にはカウンセリング・マインドの意義が十分に理解できず、なぜこのような概念・態度が国内に浸透し定着したのか、理由を把握できない。その語の土台になっているクライアント中心療法にも疑問を覚えている。

10 おわりに：

1990年代に入り、アメリカ心理学会^(注12)は心理療法の理論的立場のリストの中からクライアント中心療法を抹消した(諸富、1997)。アメリカにおいてクライアントを支援する適切な心理療法とはみなされなくなったことになる。クライアント中心療法は徐々に人気を失いだし、1993年、同療法はアメリカ国内で「多くの流派出現によってワン・オブ・ゼムになった(頼藤・中川・中尾、1993、p.115)」状態だった。5年後に國分(1998)も「アメリカでも日本でも来談者中心療法の時代は去った(p.xiv)」と述べ、さらにその後、菅村(2004)は「クライアント中心療法は[中略]どうしても時代遅れで役に立たないというイメージもつきまとう(p.203)」と記述した。

高垣(1991)はカウンセリング・マインドが重きを置かれていた時代に、

受容を教師が生徒に接するあらゆる機会に必要な基本的態度としてとらえる立場がある。「カウンセリング・マインド」という言い方にはそういうニュアンスがある。治療実践においては、受容は治療者の基本的態度であると言ってよい面があるが、はたして教育実践でも基本的態度と言っていいのか疑問である。仮りに基本的態度であるという立場に立てば、指示、要求、説得、批判等々の種々の形態の指導方法をとらなければならないときに、それらと基本的態度としての受容とはどういう関係にあると考えればいいのか。教師のなかに混乱が生じるのではなからうか。子どもをよく見ながら、指導の局面に応じて種々の形態の指導方法をとらねばならないあらゆる機会に、受容ということばにとらわれて指導の手足をしばってしまうことになりはしないか。それでは教育を殺すことになる(p.190)。

との異議を提示した。教育の実施にあたってカウンセリング・マインドは決して有益な概念・態度ではないという見解である。この種の見解が次第に随所で認められだし、現在に至っている。

文部科学省が2012年3月に作成し全国に配布した『生徒指導提要』は生徒指導や教育相談を担当する教員用のガイドラインであり、同省が同年7月に作成配布した『子どもの心のケアのために：災害や事件・事故発生時を中心に』も教員用参考資料である。このどちらにもカウンセリング・マインドの語は用いられていない。事情は不明ながら、あるいは文部科学省の担当官たちの間に教育界がカウンセリング・マインドへ傾いたことに対する反省があったのかもしれない。または、教育現場で起こったカウンセリング・マインドへの疑問が文部科学省に伝わったのかもしれない。いずれにしても、この配布物の例で類推される通り、日本教育界におけるカウンセリング・マインドの尊重は下火になったと見て良いようである。

注：

- 1 ベーシック・エンカウンター・グループはグループ・カウンセリングの一種で、人の心の治療よりも人が精神的に成長することを企図した働きかけである(伊藤、2002)。ゲシュタルト心理学者のクルト・レヴィンが考案した「Tグループ」を基にして、ロジャーズがベーシック・エンカウンター・グループに発展させた。
・伊藤義美(2002)、「ベーシック・エンカウンター・グループ」(収録：上里一郎『心理学基礎事典』、至文堂)。
- 2 正木正(1905～1959)。東京帝国大学を卒業。東北大学および京都大学の教授として教育心理学を教えた。
- 3 友田不二男(1917～2005)。東京文理科大学で心理学を専攻した。東京文理科大学そして國學院大学で教鞭を執った。
- 4 カウンセリング・マインドが学校で重視された理由として、教育者たちの間に、
学校教育というものはどのように「子どもの個性に即して」とスローガンを掲げてみても、画一化、規格化、一般化を避けることは出来ません。基本の部分では皆が同じ枠に沿って勉強し、生活していきます。子どもの特性や個性に即し、これを生かしていくとすれば、個々の教

師がそれぞれの子どもとどのように対応するかという局面が大切であり、それが適正に出来ているかということでしょう(石郷岡、1993、p.41)。

という葛藤があったからではないかと想像される。

・石郷岡泰 (1993)、『登校拒否：子どもを救うカウンセリング』、講談社。

- 5 カウンセリング・マインド自体を語った文章ではないのだが、つぎの例は、教師が生徒に関わる際のカウンセリング・マインドと想定されているものである。

高校生が、満点を取って喜んでこう言った。「先生、この前の試験で100点取ったよ！」これに対する応答は数限りなくあろう。素直な反応としては「ほー！」「えー！」「へー！」「やったね！」「すごいね！」といったところか。とりあえずこういう「あたりまえ」の反応がベストではないかと思うが、クライアントの言ったことはそのまま言い返しなさいと教わっている人は、「そう、テストで100点取ったのね」などと言うのかもしれない。もちろん場合(たとえばこの生徒が嘘をよくつくというような場合)によってということもあるが、このような応答はほとんど意味のないもののように思える。返すにしても「えー！100点！」で十分であろう。「えー！ほんとお！」でもいい。しかも、こういう場合にはその生徒のテンションよりもやや強く、つまりやや大げさに反応するのが適当であろう。もちろんそうした反応がクライアントのテンションにそぐわないケースもあるわけだが、そのときにすかさず修正する準備も怠ってはならない(菅野、2006、p.87)。

上記のうち特定のやりとりがカウンセリング・マインドの表出として最も妥当であるというのではなく、種々の配慮に基づいた生徒との関わり自体が大事、と理解すれば良いと思われる。

・菅野泰蔵 (2006)、『カウンセリング方法序説』、日本評論社。

- 6 酒鬼薔薇事件とは1997(平成9)年に発生した「神戸連続児童殺傷事件」のことである。当該事件において、事件発生前、医師

は少年の行状を心配する母親に「早急に対処するのではなく、自主性を重んじて、過干渉にならないようにしましょう。褒めて育てるようにしてください(高山、1998、p.46)」と助言していた。クライアント中心療法的な助言といえないことはないものの、実際に当該医師がクライアント中心療法を背景にして助言したのかどうかは明らかでない。

・高山文彦 (1998)、『「少年A」14歳の肖像』、新潮文庫。

- 7 無条件の肯定的配慮は、ロジャーズが重んじたカウンセラーの態度で、「受容」と同義の語である。
- 8 行為障害も反社会性パーソナリティ障害も、継続的に被害者や犠牲者を発生させてしまう病的行動パターンのことである。当人の年齢が18歳未満のときには行為障害、18歳以上のときには反社会性パーソナリティ障害、という診断名になる。
- 9 これは「ケンブリッジ・サマヴィル非行予防プロジェクト」と呼ばれる事業の報告で、ホーガン書の内容は下記Torrey書の168ページから169ページにかけて記載された情報に基づいている。
- ・E. Fuller Torrey (1992)、『Freudian fraud』、HarperCollins。
- 10 境界性パーソナリティ障害は、女性に多く見られるパーソナリティ障害である。対人関係の不安定さ、感情の不安定さ、自傷行為、などを主な特徴としている。
- 11 氏原寛(1929～)。京都大学を卒業。ユング派の臨床心理学者。大阪外国語大学、大阪市立大学、帝塚山学院大学、などの教授を歴任した。
- 12 アメリカ心理学会は、1892年に設立された、心理学者を会員とする職能団体である。2014年現在の会員数は約15万人で、心理学領域ではアメリカ最大規模の組織となっている。

文献・和書(50音順)：

- ・阿部啓子(1999)、「カウンセリングマインド」(収録：氏原寛、小川捷之、他『カウンセリング辞典』)、ミネルヴァ書房。
- ・生田倫子(2012)、「先人に訊ねる日本の心理臨床学史：岡堂哲雄先生に訊く」(収録：日

- 本心理臨床学会『心理臨床の広場』、Vol. 4、No. 2)。
- 石口彰 (2008)、「コラム：エンカウンター・グループ」(収録：石口彰『臨床心理学用語事典』)、オーム社。
 - 一瀬正央 (1995)、「クライアント中心療法」(収録：大塚義孝『こころの科学増刊：臨床心理士入門・改訂版』)、日本評論社。
 - 上地安昭 (2010)、『教師カウンセラー・実践ハンドブック：教育実践活動に役立つカウンセリングマインドとスキル』、金子書房。
 - 氏原寛 (2009)、『日本の心理臨床・1：カウンセリング実践史』、誠信書房。
 - 氏原寛 (2012)、『心とは何か：カウンセリングと他ならぬ自分』、創元社。
 - 大野精一 (2003)、「現職教員にとってもつ意味：学校心理学と学校教育相談との関わりで」(収録：日本教育心理学会『教育心理学ハンドブック』)、有斐閣。
 - 苅谷剛彦、濱名陽子、木村涼子、酒井朗 (2000)、『教育の社会学：「常識」の問い方、見直し方』、有斐閣アルマ。
 - 河上亮一 (1999)、『学校崩壊』、草思社。
 - 久野能弘 (1990)、「学習理論からみた家族」(収録：石川元『現代のエスプリ 272：家族療法と行動療法』)、至文堂。
 - 呉智英、宮崎哲弥 (1999)、『放談の王道』、時事通信社。
 - 桑原知子 (1999)、『教室で生かすカウンセリング・マインド』、日本評論社。
 - 國分康孝 (1998)、『カウンセリング心理学入門』、PHP新書。
 - 國分康孝、門田美恵子 (1996)、『保健室からの登校：不登校児への支援モデル』、誠信書房。
 - 越川房子 (1999)、「クライアント中心療法」(収録：中島義明・他『心理学辞典』)、有斐閣。
 - 小浜逸郎 (2002)、「東大卒の父親はなぜ息子の『奴隷』になったか」(収録：別冊宝島編集部『「子育て」崩壊!』)、宝島社文庫。
 - 近藤卓 (1998)、『生活カウンセリング入門：愛といやしのコミュニケーション』、大修館書店。
 - 佐治守夫 (2006)、『カウンセラーの「こころ』』、みすず書房。
 - 白石大介、立木茂雄 (1991)、『カウンセリングの成功と失敗：失敗事例から学ぶ』、創元社。
 - 菅村玄二 (2004)、「構成主義からみたクライエント中心療法：構成主義四学派との比較を通して」(収録：村瀬孝雄、村瀬嘉代子『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
 - 高垣忠一郎 (1991)、『登校拒否・不登校をめぐって：発達の危機、その「治療」と「教育』』、青木書店。
 - 高野清純 (1991)、『図でよむ心理学：生徒指導・教育相談』、福村出版。
 - 鳥越俊太郎、後藤和夫 (2000)、『うちのお父さんは優しい：検証・金属バット事件』、明窓出版。
 - 永瀬純三 (1990)、「学校におけるカウンセリングの位置づけ」(収録：真仁田昭『学校カウンセリング：その方法と実践』)、金子書房。
 - 東山紘久、藪添隆一 (1992)、『学校カウンセリングの実際：システムティックアプローチによる』、創元社。
 - 保坂亨、浅井直樹 (2004)、「日本におけるクライアント中心療法」(収録：村瀬孝雄、村瀬嘉代子『ロジャーズ：クライアント中心療法の現在』)、日本評論社。
 - 松原達哉 (1998)、「いじめている子の早期発見法」(収録：松原達哉『普通の子がふるう暴力：いじめ・暴力の心理と予防・指導法』)、教育開発研究所。
 - 松原達哉 (1999)、「キレイな子どもに育てる心の教育」(収録：行吉哉女、田中敏隆『心理学者が語る心の教育：未来を託す子どもたちへ、58のメッセージ』)、実務教育出版。
 - 村山正治 (2012)、「PCAGIP法とは何か」(収録：村山正治、中田行重『新しい事例検討法：PCAGIP入門』)、創元社。
 - 諸富祥彦 (1997)、『カール・ロジャーズ入門：自分が「自分」になるということ』、コスモス・ライブラリー。
 - 吉田武男、中井孝章 (2003)、『カウンセラーは学校を救えるか：「心理主義化する学校」の病理と変革』、昭和堂。
 - 頼藤和寛、中川晶、中尾和久 (1993)、『心理療法：その有効性を検証する』、朱鷺書房。
 - 渡辺三枝子 (1996)、『カウンセリング心理学：変動する社会とカウンセラー』、ナカニシヤ出版。
- 文献・訳書 (50音順)：
- スーザン・ケイヴ [福田周・卯月研次訳]

(2007)、『心の問題への治療的アプローチ：臨床心理学入門』、新曜社。

- Kelling, George W. [伊東博訳] (2001)、「ロジャーズ、カール (ランソム)」(収録：E・ディヴァイン、M・ヘルド、J・ヴィンソン、G・ウォルシュ 『20世紀思想家事典』)、誠信書房。
- ジョン・ホーガン [竹内薫訳] (2000)、『続科学の終焉』、徳間書店。
- C・R・ロジャーズ [保坂亨・諸富祥彦・末武康弘訳] (2005)、『ロジャーズ主要著作集・2 クライアント中心療法』、岩崎学術出版社。